九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

母親の育児不安と育児サークル

住田，正樹
九州大学大学院人間環境学研究科教育社会計画学講座 ： 教授 ： 地域教育社会学

溝田，めぐみ
九州大学大学院人間環境学研究科発達・社会システム専攻教育学コース教育社会計画学講座 ： 大学院生 ： 地域教育社会学

https://doi.org/10.15017/976

出版情報：大学院教育学研究紀要. 3, pp.23-43, 2001-03-30. 九州大学大学院人間環境学研究科発達・社会システム専攻教育学コース
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院教育学研究紀要，2000，第3号(通巻第46集)，23-43
Res. Bull. Education, Kyushu U., 2000, Vol.3, 23-43

母親の育児不安と育児サークル

住 田 正 樹 ・ 溝 田 めぐみ*

《目 次》

1．問題の所在
2．分析の枠組
3．調査の概要　　(以上，住田)
4．調査結果の分析
5．まとめ　　(以上，溝田)

1．問題の所在

本稿の目的は，母親の育児不安と育児サークル活動の効果との関連を明らかにすることにある。育児サークルは，母親たちが育児負担感あるいは育児不安の軽減と解消を図ることを目的に自発的に寄り集まって形成するインフォーマルな集団である。近年，育児に負担感や不安感を抱いたり，ときには子どもに拒否感情を抱いたりする母親が増加してきたが(1)，そうした母親たちが育児負担軽減や育児不安解消のために寄り集まって，育児情報の交換，育児の相互援助，仲間との共同学習や相互交流などの活動をするサークルが各地で見られるようになった。

育児に悩み，育児に不安を抱く母親が増えてきた背景には，社会の急激な変化がある。今日の社会の変化を一言で捉えるのは難しいが，特徴的にいえば，産業化，都市化，少子化，情報化という標識によって特徴づけられるだろう。こうした社会の変化を育児問題の視点から見れば，以下のようにいえるだろう(2)。

産業化による知識・技術の高度化とそれ故の学校教育の延長，そのために，いわゆるモラトリアム現象が生じるようになったが，そうなれば生殖家族を形成している青年層であっても未だ大人としての自覚に乏しく，子どもの養育者・保護者という立場をとることができない。むしろ子どもの世話をしなければならないことからくる束縛感，拘束感を感じ，ために育児に負担感・不安感を抱くようになるのである。

都市化は核家族化と近隣関係の希薄化をもたらした。だから母親は家族のなかにおいても近隣地域においても孤立的になり，育児経験者である親の世代とも接する機会がない。

*九州大学大学院人間環境学府博士課程

そのために育児についての相談相手もなく，育児についての学習機会もない。だから自身の育児行為に自信がもてず，不安に苛まれることになる。加えて近隣地域において青年層が子ども世代と接する機会はないから子どもや育児についての具体的イメージを描くこともできず，また育児の経験もないから，いわゆる予期的社会化ができない。そして少子化は「少なく生んでよく育てよう」という一子豪華主義を一因とするから，それ故にこそ母親にとってはよく育ってもらわなければならない。そうでなければ自身の育児能力不足を表明することになる。だから母親はよく育てなければならないという強迫観念をもつようになり，ために育児に不安感や焦燥感を抱き，負担感を感じるのである。

情報化は育児についての情報過多の問題である。今日にあっては様々な，そして事細かな育児情報が氾濫しているが，孤立的な母親は育児経験もなく相談相手もなく，そのために育児情報に依拠しつつ育児を遂行する。だが，育児情報は個別具体的ではないから，その情報が自分の子どもに当てはまるわけではない。その当てはまらないところに母親は不安と焦燥を感じるのである。

こういうわけで近年になって育児に負担感や不安感を抱いたり，またそうした負担感や不安感が解消されずに子どもに拒否感情を抱いたりする母親が増えてきたのである。そこでそうした育児負担・育児不安を軽減するために母親が同じような境遇にある仲間を求め，自発的にサークルを形成して，育児についての情報交換や学習活動，親睦活動，子どもの遊戯活動等を行うようになってきた。牧野の調査によれば[3]，社会的な活動をするために外に出る機会が多い（「よくある」と「時々ある」）母親は育児不安が少ないが（52%），活動のために外に出る機会がない（「ほとんどない」と「あまりない」）母親は育児不安が多い（74%）としている。

だが，サークル活動が母親の育児負担感や育児不安感を軽減・解消するように作用するばかりとは限らない。サークルに参加することによってメンバーの育児行為，あるいはメンバーの子どもの成育を目の当たりにし，それと照らし合わせて自身の育児行為や子どもの生育状況を判断して，逆に劣等感や育児能力不足を感じることにもなりかねない。サークル活動といっても順機能的に作用するばかりとは限らず，逆機能的に作用する場合もあるだろう。

母親の育児不安感を軽減・解消することを目的に形成された育児サークルが果たして目的通りに機能しているのかどうか，機能しているとすればどのように機能しているのか，そして機能していないとすれば，それは何故なのか。本稿の目的は，要するに育児不安の軽減・解消を目的とする育児サークル活動の，その効果を明らかにしようというわけである。

2．分析の枠組

(1) 育児サークルへの参加タイプ

育児サークル活動の効果を測定するための規準を，ここではサークル活動への母親の参加目的に求めた。母親が育児サークルに参加するのは，そのサークル活動を通して参加の目的を達成するためである。だからその目的が達成されたと思うならば，母親にとってサークル活動は効果があった

わけであり，目的が達成されていないと思えば，サークル活動の効果はなかったということになる。したがって母親の参加目的の達成を規準に育児サークルの効果を測定することができる。

一般に個人が集団に参加するのは，大別すれば，(イ)集団のメンバーに魅力を感じて参加する場合と（ロ)集団活動に魅力を感じて参加する場合とがある。育児サークルについていえば，育児サークルは母親の育児負担感や育児不安感の軽減・解消を目的に形成されるインフォーマルな，かつ自発的な集団であり，育児についての情報交換や学習活動，育児の相互援助活動，親睦活動，レクリエーション活動，子どもの遊戯活動等のサークル活動を行うから，そうした活動を目的に参加するタイプが「(ロ)集団活動」である。そして育児サークルのメンバーが近隣にいるとか，そのメンバーと頻繁に接触する機会があるとか，自分と同じような年齢あるいは境遇であるとかといった，メンバーとの近接性，接触度，類似性などによって，そのメンバーに魅力を感じて参加するタイプが「(イ)集団のメンバー」である。しかし育児サークルの場合，参加単位は母親個人ではなく，母親とその子どもという母子を単位とする。だから母親が自分だけの個人的関心・欲求の充足のために参加する場合(A）もあるが，母親が子どものためにと思って参加する場合(B）もある。前者の参加タイプを（A)母親中心型，後者の参加タイプを（B)子ども中心型としよう。母親が育児の情報交換や援助活動，育児の学習活動等のために育児サークルに参加するのは「(A)母親中心型」であるが，母親が子どもの遊び仲間をつくるためにとか子どもを集団で遊ばせたいために参加するというのは「(B)子ども中心型」である。したがって育児サークルに参加する目的ないし契機は，上記のタイプを組み合わせることによって４つのタイプに類型化することができる。

（A）母親中心型
　（イ）集団のメンバーに魅力を感じての参加型
　（ロ）集団活動に魅力を感じての参加型
（B）子ども中心型
　（イ）集団のメンバーに魅力を感じての参加型
　（ロ）集団活動に魅力を感じての参加型

しかし，こうした育児サークルへの参加のタイプは，いずれも参加の目的が明確であって，積極的であり，かつ参加に対して自発的である。こうした参加タイプを積極型(α）としよう。だが，他方で消極的な参加のタイプもある。他の母親に勧められ誘われるままに，あるいはさしたる目的もないまま，さらには時間的余裕があるからという参加タイプ等もある。消極型(β）としておこう。したがって育児サークルへの参加タイプは上記の，(α)積極型の４タイプに，(β)消極型を加えて５つのタイプに分けることができる。

しかしながら，(B)子ども中心型は，理論上は上記のように，(イ)集団のメンバーに魅力を感じて参加する場合と（ロ)集団活動に魅力を感じて参加する場合とに分けることができるが，実際の参加目的になると，明確に分けることはできない。子どもといっても乳幼児であるから自らが参加

を決定する能力をもっているわけではないから，もっぱら母親が子どものためを思って参加するのであるが，母親の，その理由は子どもの遊び仲間をつくって，その遊び仲間たちと一緒の集団活動を経験させてやりたいと思うからである。だから特定の子どもとか特定の集団活動に魅力を感じて子どもを参加させようとしているわけではない。どのような遊び仲間であってもよいし，どのような集団活動であってもよいのだ。そして子どもにとって遊び仲間づくりであろうと集団活動であろうと同じことなのである。子どもが遊び仲間をつくるということは，集団的に活動するということであり，子どもが集団的に活動するというのは，遊び仲間と一緒の活動だというわけである。だから子どもの場合は「(イ)集団のメンバー」と「(ロ)集団活動」を統合することができる。そうとすれば，育児サークルへの参加タイプは４つのタイプに分けることができる。

（α）積極型
　（A）母親中心型
　　（イ）集団のメンバーに魅力を感じて参加
　　（ロ）集団活動に魅力を感じて参加
　（B）子ども中心型
（β）消極型

今，調査結果を，このタイプ別に分類すると表１のようである。(A-イ)母親中心型 ── 集団のメンバーは22%，(A-ロ)母親中心型 ── 集団活動は５%，(B)子ども中心型は55%，つまり（α）積極型は82%であり，そして（β)消極型は18%である。しかし（A-ロ)母親中心型 ── 集団活動はごく少数であるから，これを（A-イ)母親中心型 ── 集団のメンバーと合わせて（A)母親中心型とした。したがって育児サークルへの参加タイプを，ここでは，結局，(A)母親中心型，(B)子ども中心型，(β)消極型の３タイプとした。以下では，この３つのタイプを枠組みとして，母親の育児不安と育児サークル活動の効果との関連を分析する。なお，上記５つのタイプの参加理由の回答項目は，以下の通りである（下記の７つの回答項目のなかから１つを選択)。

表１　育児サークルへの参加目的

（%，（　）内は実数）

参　加　タ　イ　プ	
（α）積極型	82.1（484）
（A）母親中心型	26.9（159）
（イ）集団のメンバーに魅力を感じて参加	22.0（130）
（ロ）集団活動に魅力を感じて参加	4.9（29）
（B）子ども中心型	55.2（326）
（β）消極型	17.9（106）
全　　体	100.0（591）

注）無回答・不明を除く。以下同様。

（α）積極型

（A）母親中心型

（イ）集団のメンバーに魅力を感じて参加

①自分（母親）の話し相手や仲間が欲しかったから〔回答項目２〕

（ロ）集団活動に魅力を感じて参加

②育児について学習したかったから〔回答項目３〕

③育児についての不安があったから〔回答項目４〕

（B）子ども中心型

④子どもの遊び仲間が欲しかったから〔回答項目１〕

（β）消極型

⑤友人・知人から誘われて〔回答項目５〕

⑥時間的に余裕があったから〔回答項目６〕

⑦何となく参加〔回答項目７〕

(2) 育児不安のタイプ

ところで，一口に育児不安といっても，その内容は多様である。育児不安は，育児という課題遂行の失敗に対する漠然とした恐れの感情をさすが，ここではその内容を以下の４つに分類した[4]。すなわち（a）「育児についての一般的な不安感情」，（b）「子どもの成長・発達に関する不安」，（c）「母親自身の育児能力に対する不安」，（d）「育児負担感・育児束縛感による不安」である。

育児は幼い生命の身体的成長や精神的発達に関わる行為であるから，母親は乳幼児の心身のみならず生活全般にわたって注意を払っていなければならないが，そうした乳幼児の生活全般わたっての不断の注意から生じる不安が（a）「育児についての一般的な不安感情」である。また育児は乳幼児の身体的成長や精神的発達を目的とするが，しかしその成長や発達の明確な規準はない。そのために常に不安が付きまとう。これが（b）「子どもの成長・発達に関する不安」である。

その乳幼児の身体的成長や精神的発達に対する不安は，翻って母親自身の育児能力に対する不安を喚起する。果たして自分は育児を遂行していく能力をもっているのかどうか。これが（c）「母親自身の育児能力に対する不安」である。そして近年は女性の就業が増加し，女性の自立が叫ばれ，それが社会的風潮ともなってきたために，育児に専念することに強い負担感や束縛感を抱いたり，あるいは疎外感を抱いたりするようになってきた。だがそうなれば母親は虚無的になり，育児に対する無力感が生じて育児意欲は低下し，育児に対する悲観的な，無力な感情に陥って育児不安が喚起するようになる。（d）「育児負担感・育児束縛感による不安」である。

以下では，育児不安の，こうしたそれぞれの内容にしたがって，育児サークル活動の効果との関連を分析する。

3．調査の概要

調査の対象は，福岡市内にある育児サークルに参加している母親である。先に述べたように，育児サークルは，母親たちが育児不安の軽減と解消を図ることを目的に自発的に寄り集まって形成するインフォーマルな集団である。したがって外部からサークル活動を捉えることは困難であり，したがって調査に際しては，まず育児サークルの存在自体を把握しなければならない。育児サークルはメンバー個人の自宅で全く独自に活動しているものもあるが，公民館や地区集会所等の施設で活動しているものもあり，また保健所に登録して随時アドバイスを受けているもの，育児雑誌等に登録して相互に交流をはかっているもの等がある。そこでわわれれは福岡市各区の保健所を訪ねて調査の趣旨を説明し，調査協力を依頼することにした。保健所は，登録している育児サークルしか把握していないが，サークルの名称，代表者名，代表者の連絡先を把握している。そこでまず保健所の担当者から育児サークルの代表者に調査の趣旨と方法を説明してもらい，協力を得られたサークルについては，代表者と連絡をとってメンバーの人数を確認した上で，調査票と依頼状および返信用封筒をセットにしてメンバーの人数分をだけ代表者宛に送付し，代表者からサークル活動時に各メンバーに配布してもらうこととした[5]。そしてメンバーは調査票に記入の上，各自が大学宛に郵送返却することとした。

こうして協力を得られた育児サークルは，69サークルであり，各代表者に確認したメンバーの合計＝調査対象者は，1204人である。回収票は621票，回収率は51.6％であった。調査時期は，1999（平成11）年10月から12月上旬にかけてである。サークルによって活動日がまちまちであるため代表者から各メンバーへの調査票の配布に時間がかかり，調査期間が長引いた。

（住田正樹）

4．調査結果の分析

(1) 対象者の属性と人間関係

先に述べたように，ここでは育児サークルの活動効果を明らかにすることが目的である。そのため，母親の，育児サークル活動への参加目的の達成に対する判断を活動効果を測定する基準としたのであるが，分析に先立ち，まずサークルの実態を見ておく。

表２は，参加タイプ別に母親の年齢を見たものである。育児サークルの母親の年齢は，30代に７割が集中しているのが分かる。育児サークルの趣旨と活動からいえば，当然のことながらメンバーは，精々２～３歳以下の，年齢差のない乳幼児の母親であろうから，母親自身の年齢の幅も広くはないのであろう。当初は，母親が若いほど育児経験も育児知識も乏しく，そしてまた育児不安も高いために，育児の共同学習とか他の母親との交流を望んで，育児サークルに参加するのではないかと思われたが，参加タイプ別による年齢差は見られなかった。

表３は，子どもの人数を見たものであるが，過半数が子どもは１人としている。その中でも，子

どもの人数が１人というのが多いのは母親中心型である。したがって母親は，20代であろうと30代であろうと，年齢に関わりなく，最初の子どものときに，他の母親との交流とか育児の共同学習を目的にサークル活動に参加するのである。

表２　参加型と母親の年齢

(%)

参加型	母親の年齢			(N)
	20代以下	30代	40代以上	
母親中心型	28.3	71.1	0.6	(159)
子ども中心型	27.3	68.7	4.0	(326)
消極型	31.1	66.1	2.8	(106)
全体	28.3	68.8	2.9	(591)

表３　子どもの人数

(%)

参加型	子どもの人数			(N)
	１人	２人	３人以上	
母親中心型	66.4	30.4	3.2	(158)
子ども中心型	51.2	40.2	8.6	(326)
消極型	53.8	38.7	7.5	(106)
全体	55.8	37.3	6.9	(590)

$p<0.05$

それでは，育児サークルへの参加タイプとサークル入会時期の子どもの年齢は関連するのだろうか。サークル活動へ参加したときの子どもの年齢を見ると，表４のようである。参加のタイプを相互に比較して傾向を特徴的にいうと，母親中心型は１歳未満，子ども中心型は１歳，消極型は２歳以上が多くなっている。子ども中心型は子どもの遊び仲間づくりが目的の参加タイプであるから，当然のことながらある程度子どもが成長していなければならない。しかし母親中心型は母親が自身のために参加するのであるから，子どもの年齢には関係はない。母親中心型は育児を自身に関わる問題として早い内から認識している母親なのである。

表４　参加型と入会時の子どもの年齢

(%)

参加型	入会時の子どもの年齢			(N)
	１歳未満	１歳	２歳以上	
母親中心型	45.9	44.0	10.1	(159)
子ども中心型	27.3	50.0	22.7	(326)
消極型	19.8	44.4	35.8	(106)
全体	31.0	47.3	21.7	(591)

$p<0.01$

なお，母親の就業形態では殆どが専業主婦であり，参加のタイプ別による差はなかった。ちなみに対象者全員について見ると，専業主婦：93.6%，内職：1.8%，自営業：1.1%，パートタイム：1.1%，フルタイム：0.6%，その他：1.8%であった。育児サークルは平日の日中に活動している

ので，メンバーには専業主婦が多いのである。

居住歴については，表５のように，子ども中心型と消極型が類似的なパターンを示している。大雑把に特徴をとらえれば，いずれのタイプも３年未満層と５年以上層が多く，３年以上５年未満層は少ないというU字型を示している。しかし母親中心型は逆に山型を示し，居住年数３年以上５年未満が多い。これと類似したパターンは表６の「地域の人々が子どもを見守ってくれるか否か」についての質問の回答結果にも表れている。子ども中心型と消極型は，肯定的に回答しており，否定的回答を上回っているが，母親中心型は否定的回答の方が多い傾向が見られる（但し有意差なし）。つまり，「地域の人々は子どもをあまり見守ってくれない」と感じているわけである。同様の傾向は表７の近隣関係の親密度の様相にも表れている。母親中心型は，他の参加タイプに比して，近隣関係が希薄なようである。これらのことを関連させていうと，母親中心型は，居住歴は３～５年で長いとはいえず，そのために近隣関係も豊富でない。だから地域に溶け込んでいるわけでもないから「地域の人々が子どもを見守ってくれるか否か」について肯定的な回答ができないのである。だからこそ自身の話し相手や仲間を求めてサークル活動に参加するのである。

表５　参加型と居住歴

（%）

参加型	居住歴			（N）
	３年未満	３年以上５年未満	５年以上	
母親中心型	39.6	37.1	23.3	(159)
子ども中心型	40.8	25.8	33.4	(326)
消極型	39.6	27.4	33.0	(106)
全体	31.0	47.3	21.7	(591)

$p<0.1$

表６　参加型と地域の人が子どもを見守ってくれる

（%）

参加型	見守ってくれる		（N）
	はい	いいえ	
母親中心型	46.5	53.5	(159)
子ども中心型	52.3	47.7	(325)
消極型	54.3	45.7	(105)
全体	51.1	48.9	(589)

表７　参加型と近隣関係の親密度

（%）

参加型	近隣関係の親密度		（N）
	低い	高い	
母親中心型	62.3	37.7	(159)
子ども中心型	61.7	38.3	(326)
消極型	49.5	50.5	(105)
全体	59.7	40.3	(590)

$p<0.1$

これに対して消極型は居住歴も長く，近隣関係も豊富である。だから「地域の人々は子どもを見守ってくれる」と思っているのである。したがって消極型は，サークル活動に参加しなくても居住地において日常的に接触する親密な人々がいたのであり，あるいは誘われるほど親密な近隣関係があったということなのではないか。だから消極的な参加だとはいっても参加度は高いから積極的に活動していたのであろうし，だからこそ満足度も高いのである。子ども中心型は消極型と類似的なパターンを示しているが，消極型ほど近隣関係は親密でない。

(2) 育児サークル活動の効果

まず育児サークル活動への参加度と満足度をみよう。ここでは育児サークルへの参加度を「ほとんど参加」，「ときどき参加」，「あまり参加しない」の３段階に区分して聞いたが，「ほとんど参加」を参加度の高い群，後二者を参加度の低い群と分類した。また育児サークルへの満足度については「非常に満足」，「まあ満足」「あまり満足していない」，「ぜんぜん満足していない」の４段階に区分して聞き，前二者を満足度の高い群，後二者を満足度の低い群と分類した。結果は表８のようである。母親中心型に参加度が高い傾向が見い出された。育児の共同学習にしろ母親同士の交流や情報交換にしろ，このタイプの母親は自身の関心から参加したのであるから，それだけ参加頻度が高いのである。だが，満足度については参加タイプによる差は見られなかった。しかし参加度については８割，満足度については９割の母親が高いとしているから，一般にサークルへの参加度は高く，満足度も高いといってよいだろう。

表８　参加型と育児サークルへの参加度と満足度

(%)

参加型	参加度		(N)	満足度		(N)
	低い	高い		低い	高い	
母親中心型	15.1	84.9	(159)	8.2	91.8	(159)
子ども中心型	23.2	76.8	(323)	9.5	90.5	(325)
消極型	23.6	76.4	(106)	4.7	95.3	(106)
全体	21.1	78.9	(588)	8.3	91.7	(590)

$p<0.1$

こうした育児サークル活動の参加度と満足度を高めているのが，その活動効果である。活動の効果が高ければ，当然のことながら参加度も高く，満足度も高いだろう。表９は，参加タイプ別にサークル活動の効果をみたものである。効果といってもプラスの効果だけとは限らない。マイナスの効果もあるだろう。プラスの効果については参加目的と対応させた項目を考え，マイナスの効果については他のメンバーとの比較の項目を考えた。表に見るように，活動効果は参加目的に対応している傾向が見られる。母親中心型は「(自分の) 生活にハリができた」が多く，子ども中心型は「子

どもに遊び仲間ができた」が多い傾向が見られる。いずれも有意差がみられた。

話し相手や自身の仲間づくりができたとするのは，参加タイプによる差はなく，86％の母親が効果ありとしている。サークルは母親がメンバーであるから，とにかく参加し活動していれば，参加タイプの如何にかかわらず，母親同士の関係の輪は自ずと広がっていくだろう。だから参加タイプによる差はないのである。しかし育児についての学習，育児不安の減少，育児に自信という育児に関わる活動の効果については，幾分，母親中心型が効果ありとしている比率が高い。ちなみに，この育児に関わる３項目を合計すると，母親中心型は77％，子ども中心型は64％，消極型は70％となり，母親中心型が効果ありとする比率が幾分高い（但し有意差なし）。つまり母親中心型は，元々話し相手や自身の仲間づくり，あるいは育児の共同学習がサークルへの参加目的であるから，そうした目的については達成されていると感じているわけである。当初の目的が達成されていると判断しているのであるから，したがってその結果として「生活にハリがでてくる」わけである。子ども中心型は，子どもの遊び仲間づくりが目的であるから，そしてそれ故にサークルのなかでも，そのように活動するであろうから，子どもの遊び仲間づくりができたとする。

こういうわけで母親中心型は「生活にハリができ」，子ども中心型は「子どもに遊び仲間ができた」が多い傾向が見られる。いずれも有意差がみられた。しかしそうした目的がある程度達成され，プラスの効果があったと判断する一方で，そうした目的が達成されないと判断する場合もある。そうした場合は，その目的が焦点づけられているだけに目的が達成されなかったことが，かえってマイナスの効果を生みだしたように感じられるのではないか。あるいは効果があったかどうか分からない，あるいはどちらともいえないという消極的な回答ではなく，明らかに活動の効果がなかったと判断しているのであるから，明確にマイナスの効果を意識しているのであろう。このマイナスの効果も参加目的に対応している傾向が見られるようである。つまり母親中心型は「他の母親の話を

表９　参加型と育児サークル活動の効果

（複数回答）（％）

参加型	サークル活動の効果								（N）
	プラスの効果						マイナスの効果		
	子どもに遊び仲間ができた＊	自分自身の話し相手や仲間ができた＊＊	生活にハリができた	育児についていろいろ学習できた	育児について不安がなくなった	育児に自信ができた	他の母親の話を聞いて焦ったり不安になった	他の子どもの様子をみて焦ったり不安になった	
母親中心型	74.2	88.7	54.7	45.3	18.2	13.2	10.7	9.4	(159)
子ども中心型	85.4	85.7	40.4	39.1	15.5	9.6	7.1	9.0	(326)
消極型	79.2	84.9	34.0	46.2	14.2	9.4	3.8	12.3	(106)
全体	81.3	86.4	43.1	42.1	16.0	10.6	7.5	9.7	(591)

（＊:p<.05，＊＊:p<.01）

聞いて不安や焦燥感をもつ」ようになり，子ども中心型は「他の子どもの様子を見て不安や焦燥感をもつ」ようになったとしている。目的が明確であるだけに，そこに母親の注意が焦点づけられ，その視点からメンバーに接するために，そのメンバーを比較の基準として見るのである。だから，育児サークル活動は確かに母親にとってプラスに機能し，そうした場合が多いのだが，他方でメンバーが自己との，あるいは自分の子どもとの比較基準として作用し，マイナスの効果を生じさせる場合もあるのだ。つまり育児についての不安と焦燥感をかきたてる方向に作用しているのであり，育児サークルの目的に逆行しているわけである。

(3) 育児サークル活動と育児不安

上記のように，育児サークル活動が母親にとってプラスに機能する場合もあるが，他方でマイナスの効果を生じさせる場合もあるとすれば，育児サークル活動と母親の育児不安とはどのような関係にあるのだろうか。

表10～13は，育児サークル活動への参加タイプ別に育児不安の４タイプ，すなわち「育児についての一般的な不安感情」，「子どもの成長・発達についての不安」，「母親自身の育児能力に対する不安」，「育児負担感・育児束縛感から生じる不安」それぞれにについて見たものである。だが参加タイプ別による育児不安の程度に差異は見られなかった。

表10　参加型と育児についての一般的な不安感情

(%)

参加型	一般的な不安感情		(N)
	低い群	高い群	
母親中心型	60.8	39.2	(158)
子ども中心型	64.6	35.4	(325)
消極型	55.8	44.2	(104)
全体	62.0	38.0	(587)

表11　参加型と子どもの成長・発達についての不安

(%)

参加型	成長・発達についての不安		(N)
	低い群	高い群	
母親中心型	68.6	31.4	(159)
子ども中心型	64.1	35.9	(326)
消極型	66.0	34.0	(106)
全体	65.7	34.3	(591)

表12　参加型と母親自身の育児能力に対する不安

(%)

参加型	育児能力に対す不安		(N)
	低い群	高い群	
母親中心型	50.9	49.1	(159)
子ども中心型	52.5	47.5	(326)
消極型	51.9	48.1	(106)
全体	51.9	48.1	(591)

表13　参加型と育児負担感・束縛感から生じる不安

(%)

参加型	負担感・束縛感からの不安		(N)
	低い	高い	
母親中心型	50.3	49.7	(159)
子ども中心型	52.9	47.1	(325)
消極型	50.9	49.1	(106)
全体	51.9	48.1	(590)

それでは，母親は育児サークルに入ることによって育児不安に変化はないのだろうか。母親が育児サークルに入る前と入った後の不安を比較してみよう。表14は子供が誕生したあとの不安を参加のタイプ別にみている。実際には，「あなたは，お子さんを産んだ後，育児をすることに不安をもちましたか」という質問項目で聞き，「非常に不安をもった」，「少し不安をもった」，「あまり不安をもたなかった」，「全然不安をもたなかった」の４段階で回答してもらった。ここでは，育児サークル参加後との不安の比較を行うため，後二者を統合して３段階での分析を行った。その結果，子ども誕生後に「非常に不安をもった」母親は母親中心型がやや高く（有意差なし），全体では20～30％程度いた。「少し不安をもった」が約半数，そして「あまり，もしくは全然不安をもたなかった」という母親が30％程度だった。

表14　参加型と子どもが誕生した後の育児不安

（％）

参加型	不安の程度			（N）
	非常に不安をもった	少し不安をもった	あまり・全然不安をもたない	
母親中心型	28.5	44.3	27.2	(158)
子ども中心型	19.9	51.6	28.5	(326)
消極型	19.8	48.1	32.1	(106)
全体	22.2	49.0	28.8	(590)

育児サークル参加後の育児不安については，４タイプの育児不安それぞれをみていくことが出来る。４タイプの育児不安それぞれについて具体的な質問項目を４ないし５つ設けている。それぞれについて「よくある」，「ときどきある」，「あまりない」の３段階で回答してもらった。育児不安のタイプそれぞれで選択された回答の平均を出した。その結果が表15である。それぞれの育児不安のタイプの質問に対して「よくある」という母親は10％程度であり，「ときどきある」が20～40％程度，「あまりない」が約半数と，表15の結果と比較して，全体的に育児サークル参加後の方が不安

表15　育児サークル参加者と育児不安

（％）

育児不安のタイプ	よくある	ときどきある	あまりない	（N）
一般的な不安感情	8.9	44.6	46.5	(589)
成長・発達についての不安	7.4	22.8	69.8	(591)
育児能力に対する不安	9.0	45.3	45.7	(591)
負担感・束縛感からの不安	11.6	40.8	47.6	(591)
全体	9.2	38.7	52.1	(2362)

が低くなっている。参加タイプによる育児不安に大きな違いはなかったが，この結果から，育児サークルは母親の育児不安を軽減していると言ってよいであろう。

それでは次に，育児サークル活動の効果が育児不安にどのような影響を及ぼしているのか，参加タイプ別にみていく。サークル活動の効果をここでは，表９に見るように，８つの項目で捉えようとしたのであるが，これを４つにカテゴリー化した。表16は，その結果である。すなわち，「母親に対する効果」，「育児に対する効果」，「子どもに対する効果」というプラスの効果と，「マイナスの効果」である。

「母親に対する効果」とはサークル活動が母親にとってプラスの効果をもたらしたとするものであり，「育児に対する効果」とは母親が現に遂行している育児に対してプラスの効果が見られたというものである。この，それぞれのカテゴリーに分類される項目は「自分自身の話相手や仲間ができた」，「生活にハリができた」および「育児についていろいろ学習できた」，「育児について不安がなくなった」，「育児に自信ができた」である。また「子どもに対する効果」とは「子どもの遊び仲間ができた」ことである。

これら３つのカテゴリーはプラスの効果であるが，これに対して，サークルに参加することによって，他のメンバーや子どもに注意が向き，彼らを比較規準にして自分と自分の子どもを判断し評価するようになる場合がある。その場合，その比較基準である他のメンバーとの間に差異や格差を強く意識するようになると逆に不安が増幅するようになる。このことについては既に述べたが，これを「マイナスの効果」とした。

表16　育児サークル活動の効果のタイプ

（複数回答）（%，（　）内は実数）

サークル活動の効果	自分自身の話し相手ができた	86.6 (538)	母親の効果	プラスの効果
	生活にハリができた			
	育児についていろいろ学習できた	48.1 (299)	育児の効果	
	育児について不安がなくなった			
	育児に自信ができた			
	子どもの遊び仲間が出来た	78.3 (486)	子どもの効果	
	他の母親の話を聞いて焦ったり不安になった	13.0 (81)	マイナスの効果	
	他の子どもの様子をみて焦ったり不安になった			

こうしたサークル活動の４タイプの効果と育児不安の４タイプとの関連を，サークルへの参加タイプ別に見たのであるが，このことから大凡，次のような事実が指摘できる。

まず，「育児についての一般的な不安感情」と育児サークル活動の効果との関連を参加のタイプ別に見ると，表17のようになる。母親中心型では「育児に対する効果」と「育児の一般的な不安感

情」との間に有意差がみられた。すなわち育児サークルに自分の仲間づくりとか育児の共同学習という目的をもって参加した母親で，サークルに参加して「育児に対する効果」があったとする母親は，「育児についての一般的な不安感情」が低くなっているが，サークル活動の効果がないと感じている母親は，「一般的な不安感情」が高くなっている。この場合の母親は育児についての共同学習を目的にサークルに参加しているであろうから，実際にその活動効果はあったと感じれば，子どもを源泉とする育児不安，すなわち「育児についての一般的な不安感情」は軽減していくのである(表16も参照)。しかし子どもの仲間づくりを目的にサークルに参加した子ども中心型では，マイナ

表17　参加型別による育児サークル活動の効果と育児についての一般的な不安感情

(%，(　)内は実数)

参加型	育児サークル活動の効果		一般的な不安感情 低い群	一般的な不安感情 高い群	全体
母親中心型	母親の効果	あり	61.5	38.5	100.0 (148)
		なし	50.0	50.0	100.0 (10)
	育児の効果 *	あり	68.2	31.8	100.0 (88)
		なし	51.4	48.6	100.0 (70)
	子どもの効果	あり	62.7	37.3	100.0 (118)
		なし	55.0	45.0	100.0 (40)
	マイナスの効果	あり	56.0	44.0	100.0 (25)
		なし	61.7	38.3	100.0 (133)
子ども中心型	母親の効果	あり	64.4	35.6	100.0 (284)
		なし	67.6	32.4	100.0 (37)
	育児の効果	あり	65.8	34.2	100.0 (149)
		なし	64.0	36.0	100.0 (172)
	子どもの効果	あり	63.1	36.9	100.0 (274)
		なし	74.5	25.5	100.0 (47)
	マイナスの効果 **	あり	42.9	57.1	100.0 (42)
		なし	68.1	31.9	100.0 (279)
消極型	母親の効果	あり	55.1	44.9	100.0 (89)
		なし	60.0	40.0	100.0 (15)
	育児の効果	あり	61.5	38.5	100.0 (52)
		なし	50.0	50.0	100.0 (52)
	子どもの効果	あり	57.8	42.2	100.0 (83)
		なし	47.6	52.4	100.0 (21)
	マイナスの効果	あり	35.7	64.3	100.0 (14)
		なし	58.9	41.1	100.0 (90)

(*:p<.05，**:p<.01)

スの効果と「育児についての一般的な不安感情」の間に有意差が見られた。マイナスの効果，つまり他のメンバーの子どもを比較規準にして自分の子どもを評価するような場合，母親の「育児についての一般的な不安感情」は高くなっているのである。しかし全体としてみると，有意差は見られなかったものの，大方の傾向として，サークル活動の効果があったとする場合の母親の育児不安は低く，サークル活動の効果がなかったとする場合の母親の育児不安は高い。

サークル活動の効果があったと感じている母親の育児不安は低く，サークル活動の効果がないと感じている母親の育児不安は高いという傾向は，他の育児不安の場合も同様である。表18の「子ど

表18　参加型別による育児サークル活動の効果と子どもの成長・発達についての不安

(%)

参加型	育児サークル活動の効果		成長・発達についての不安 低い群	成長・発達についての不安 高い群	全体
母親中心型	母親の効果	あり	68.2	31.8	100.0 (148)
		なし	72.7	27.3	100.0 (11)
	育児の効果	あり	66.3	33.7	100.0 (89)
		なし	71.4	28.6	100.0 (70)
	子どもの効果	あり	70.3	29.7	100.0 (118)
		なし	63.4	36.6	100.0 (41)
	マイナスの効果 +	あり	48.0	52.0	100.0 (25)
		なし	72.4	27.6	100.0 (134)
子ども中心型	母親の効果	あり	65.3	34.7	100.0 (285)
		なし	54.1	45.9	100.0 (37)
	育児の効果	あり	68.5	31.5	100.0 (149)
		なし	60.1	39.9	100.0 (173)
	子どもの効果	あり	62.9	37.1	100.0 (275)
		なし	70.2	29.8	100.0 (47)
	マイナスの効果 *	あり	52.4	47.6	100.0 (42)
		なし	65.7	34.3	100.0 (280)
消極型	母親の効果	あり	67.0	33.0	100.0 (91)
		なし	60.0	40.0	100.0 (15)
	育児の効果	あり	66.0	34.0	100.0 (53)
		なし	66.0	34.0	100.0 (53)
	子どもの効果	あり	70.2	29.8	100.0 (84)
		なし	50.0	50.0	100.0 (22)
	マイナスの効果 **	あり	35.7	64.3	100.0 (14)
		なし	70.7	29.3	100.0 (92)

(+:p<.1, *:p<.05, **:p<.01)

もの成長・発達についての不安」，表19の「母親自身の育児能力に対する不安」，表20の「育児負担感・育児束縛感から生じる不安」についても同様の傾向が見られる。取り分け，育児サークル活動のマイナス効果の場合に，育児不安の程度は明らかに高くなっている。他のメンバーや他の子どもを比較規準にして自分自身や自分の子どもを判断し評価するのであるから，比較規準は明確であり，その差異や格差は可視的で具体的である。だから，その差異や格差を強く意識するようになれば容易に不安状況に陥っていく。つまりマイナス効果の場合は，分かりやすいわけである。だから育児サークルは，高い効果のある活動もするが，その反面においてメンバー相互がそれぞれを比較基準

表19　参加型別による育児サークル活動の効果と母親自身の育児能力に対する不安

(%)

参加型	育児サークル活動の効果		育児能力に対する不安 低い群	育児能力に対する不安 高い群	全体
母親中心型	母親の効果	あり	53.4	46.6	100.0 (148)
		なし	18.2	81.8	100.0 (11)
	育児の効果	あり	55.1	44.9	100.0 (89)
		なし	45.7	54.3	100.0 (70)
	子どもの効果	あり	52.5	47.5	100.0 (118)
		なし	46.3	53.7	100.0 (41)
	マイナスの効果 *	あり	40.0	60.0	100.0 (25)
		なし	53.0	47.0	100.0 (134)
子ども中心型	母親の効果	あり	54.4	45.6	100.0 (285)
		なし	40.5	59.5	100.0 (37)
	育児の効果	あり	51.0	49.0	100.0 (149)
		なし	54.3	45.7	100.0 (173)
	子どもの効果	あり	54.2	45.8	100.0 (275)
		なし	44.7	55.3	100.0 (47)
	マイナスの効果 **	あり	23.8	76.2	100.0 (42)
		なし	57.1	42.9	100.0 (280)
消極型	母親の効果	あり	50.5	49.5	100.0 (91)
		なし	60.0	40.0	100.0 (15)
	育児の効果	あり	52.8	47.2	100.0 (53)
		なし	50.9	49.1	100.0 (53)
	子どもの効果	あり	51.2	48.8	100.0 (84)
		なし	54.5	45.5	100.0 (22)
	マイナスの効果 +	あり	28.6	71.4	100.0 (14)
		なし	55.4	44.6	100.0 (92)

(+:p<.1, *:p<.05, **:p<.01)

として自己を判断し評価するように働くので，逆にメンバーの育児不安を育児サークルに参加することによって増幅させていくように作用する場合もある。

表20　参加型別による育児サークル活動の効果と育児負担感・育児束縛感から生じる不安

(%)

参加型	育児サークル活動の効果		負担感・拘束感からの不安		全　体
			低い群	高い群	
母親中心型	母親の効果	あり	52.0	48.0	100.0 (148)
		なし	27.3	72.7	100.0 (11)
	育児の効果	あり	50.6	49.4	100.0 (89)
		なし	50.0	50.0	100.0 (70)
	子どもの効果	あり	48.3	51.7	100.0 (118)
		なし	56.1	43.9	100.0 (41)
	マイナスの効果	あり	44.0	56.0	100.0 (25)
		なし	51.5	48.5	100.0 (134)
子ども中心型	母親の効果	あり	53.2	46.8	100.0 (284)
		なし	54.1	45.9	100.0 (37)
	育児の効果	あり	56.1	43.9	100.0 (148)
		なし	50.9	49.1	100.0 (173)
	子どもの効果	あり	53.6	46.4	100.0 (274)
		なし	51.1	48.9	100.0 (47)
	マイナスの効果	あり	50.0	50.0	100.0 (42)
		なし	53.8	46.2	100.0 (279)
消極型	母親の効果	あり	49.5	50.5	100.0 (91)
		なし	60.0	40.0	100.0 (15)
	育児の効果	あり	56.6	43.4	100.0 (53)
		なし	45.3	54.7	100.0 (53)
	子どもの効果	あり	54.8	45.2	100.0 (84)
		なし	36.4	63.6	100.0 (22)
	マイナスの効果 **	あり	14.3	85.7	100.0 (14)
		なし	50.9	49.1	100.0 (92)

(**:p<.01)

5．まとめ

母親の育児不安を軽減・解消することを目的に自然発生的に形成されたインフォーマルな育児サークルの活動効果を分析してきたが，分析の結果，以下の諸点が明らかになった。

（1） 育児サークルは乳幼児の母親が参加するから母親の年齢幅も狭く，30歳代が大半を占める。

（2） 母親は，最初の子どもの時は自分自身のために育児サークルに参加する場合が多い。

（3） 子どもの遊び仲間づくりを目的に育児サークルに参加する場合，子どもが1歳くらいの時に育児サークルに入会する母親が多い。

（4） 母親が自身のために参加するのは，居住歴が短く，近隣関係も希薄なため，話し相手や仲間がいないためであり，そのために地域の人が子どもを見守ってくれているとは感じていない。

（5） 育児サークルへの参加度は，子どものために参加した母親が最も高い。そして参加タイプの如何にかかわらず，一般に育児サークルへの参加度，満足度も共に高い。

（6） 育児サークル活動に自身のために参加した母親は大方が「生活にハリができた」としている。また子どもの遊び仲間づくりを目的にサークルに参加した場合は，子どもの遊び仲間もできている。つまり参加目的を達成している場合が多い。

（7） 育児サークル活動の効果として育児不安が軽減する場合もあり，また育児についての学習効果もある。しかしサークルに参加することによってメンバー相互が比較対照され，育児不安が逆に増幅される場合もある。

（8） 育児不安のどのタイプも，育児サークルへの参加のタイプによって不安の程度は異なる。

（9） 育児サークルの参加目的によって，サークル活動の効果が育児不安に及ぼす影響が異なる。

（10） 育児サークルの活動に参加し，母子の友達が出来たり，育児について学習できたり，または，他の母親や子どもをみて焦ったりしても，育児サークルで得られたそれらの効果がすべて育児不安（4タイプすべてにおいて）の軽減または増加に繋がるものではない。

さらに，育児サークルでの効果はそれが母子の仲間ができた，といったよい効果が得られたときよりも，他の母子をみて焦ったりした，といった負の効果があったときの方が，育児不安に与える影響は大きい。すなわち，負の効果があったときは育児不安が高くなりやすい。

（溝田めぐみ）

注

（1） 丹羽洋子『今どき子育て事情』（ミネルヴァ書房　1999）には，最近の若い母親が何事につけて不安を抱いていることが示されている。

（2） 詳細は，住田正樹「地域における育児ネットワークの可能性」『九州大学教育学部紀要（教育学部門）』第39集（1994）を参照。

（3） 牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉」『家庭教育研究所』第２号（1981）。

（4） 詳細は，住田正樹「母親の育児不安と夫婦関係」日本子ども社会学会編『子ども社会研究』５号（1999）を参照。

（5） しかし保健所に登録されているサークルといっても必ずしも多くはない。サークルの方から保健所に届け出ることになっているからアドバイスの依頼とか活動場所の依頼等の必要がなければ届け出ないのだろうとと思われる。福岡市７区のうち協力を得られた６区の保健所は，いずれも把握しているサークルは20程度である。

付　記

本稿は，日本教育社会学会第52回大会（平成11年９月15日～17日，於・北海道大学）における共同研究発表「母親の育児不安と育児サークル」に若干の加筆・修正を行ったものである。

A Study on Mothers' Child-Care-Anxiety and Child-Care Circles

Masaki Sumida & Megumi Mizota

The purpose of this paper is to make it clear the relationship between mothers' child-care-anxiety and the effect of child-care circle activities.

Child-care circle came to be formed everywhere. Today's young mothers have worries of everykind for their child-care and have difficulties in bringing up their children without experiences of the child-care. So, mothers began to form child-care circles so that they might talk and do learning about the child-care with their companies. In other words, the aim of child-care circle is to remove and reduce mothers' child-care-anxiety. But there are actually various purposes of mother's joining the circle. There are two types that mother joins it: positive type and negative type. But positive type can be sorted in two further. By one, it is the type which mother makes the circle with her company and talk together and learn again about the child-care. One more is the type which mother participate in so that she may make child's playmates. Negative type is participation for the reason that mothers are free or are asked by other people. Therefore, the type that mother participates in the child-care circle is divided into three.

We made these three types the analysis outline, and analyzed the relationship between mothers' child-care-anxiety and the effect of child-care circle activities.

And then the contents of mothers' child-care-anxiety were classified here in four: the general emotion concerning child-care, child-care-anxiety about child's growth and development, the anxiety which mother feels in her child-care ability, the anxiety by the discontent and the weakness which is born of the burden of the child-care and the restraint of the child-care.

We carried out mailing investigation targeting the mothers who participated in the child care circle in Fukuoka City, and got an answer from 621 people. The collection rate was 51.68%. The investigation period is during December from October, 1999.

The various following points became clear as a result of the analysis.

(1) In the positive type which mothers participated in child-care circles to make their companies, most of mothers feel life to be fresh. Then, in another type which mother participated in for the child, most of mothers are satisfied that their children could make their playmates.

(2) It shows a tendency to ease mothers' child-care-anxiety by participating in child-care circles. But mother's child-care-anxiety may increase by participating in the child-care-circle conversely. It is because mothers compare the way of her child-care with the way of the child-care of the member of the circle by participating in it and they come to lose confidence. And then mothers

compares their child and other member child and have the worry of whether their child's growth and development are delayed.

(3) As the reason of participating in the child-care circles varies, the degree of mother's child-care-anxiety is different. In other words, the degree of effect of the child-care circle activities varies in the purpose of the participation.